平成22・23年度
熊本県教育委員会指定「生きる力」を育む研究指定校・大津町教育委員会指定
学力充実研究推進校

研究紀要

研究主題
一人一人の学びを大切にする授業の創造
～「わかる」「できる」授業づくりの工夫を通して～

平成23年11月25日（金）
大津町立大津北中学校

はじめに

「知識基盤社会」の時代において、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」を育むことがますます重要になっています。そのような中、各種の調査結果から見える、思考力・判断力・表現力等についての課題や学習意欲、学習習慣・生活習慣についての課題、さらに、自分への自信の欠如や自らの将来への不安、体力の低下といった課題など適切に対応しなければなりません。これを踏まえ、次年度からの新学習指導要領の全面実施に伴い、「確かな学力」をどのようにして育成するか、さまざまな工夫と努力が積み重ねられて、それぞれの学校で研究が進められているところだと思います。本校でも「人間尊重の精神を基盤にして、たくましい心身と豊かな人間性及び磨かれた知性を備え、自己の未来を切り開く活力ある生徒を育成する」を学校目標に掲げ、全職員一丸となって取り組んでいます。

さて、本校では、平成２２・２３年度熊本県教育委員会指定の“「生きる力」を育む研究指定校（学力充実研究推進校）”並びに大津町教育委員会指定の“特色ある学校づくり「学力向上・充実」”の研究指定校として、平成２２年度「学ぶ意欲を維持、向上させる学習集団の育成」、平成２３年度「一人一人の学びを大切にする授業の創造」という研究主題のもと、これまで取り組んできました。

１年目、ノートをとらない生徒、忘れ物をする生徒、姿勢の悪い生徒、居眠りをする生徒、おしゃべりをする生徒、提出物を出さない生徒等、学習への心構えが不十分と感じ、「点数より姿勢（構え）を」ということで、まずは学習できる雰囲気をつくることから取り組みました。

また、学力（熊本県学力調査やNRT）については、１年生から２年生に進級する時の落ち込みが大きいこと、学年が上がるごとに低下することから、１年生への丁寧な授業づくりや「わかる」「できる」授業づくりを目指して取り組んできました。

本校の研究は、目新しいものはなく、日々の実践を取りまとめたものです。しかし、少しずつではありますが、学習できる雰囲気や環境づくり、教材研究や授業研究を通して、教職員と生徒、生徒同士、教職員同士のまとまりが深まってきたと感じているところです。皆様の忌憚のないご意見や感想、ご指導やご助言をいただき、さらに努力を重ねて行きたいと考えています。

最後になりましたが、本研究の推進に当たり、ご指導、ご助言をいただきました熊本県教育委員会、菊池教育事務所、大津町教育委員会に心から感謝とお礼を申し上げます。

平成２３年１１月２５日

大津町立大津北中学校　校長　豊岡　秀敏

り組ませるための教師側の手立ては十分であるとは言えない。従って、これまでの取組で全ての生徒が満足できる学力や表現力が身についているとは言えない状況にあり、改善の余地がある。

また平成２２年度県学力調査（ゆうチャレンジ）定着率の結果から、昨年度の生徒の実態として、学年が上がるに従って、ほとんどの教科において定着率が低くなっているという実態がある。つまり１学年の時点での学力が一番高く、学年が上がるにつれて学力が下がる状況にある。

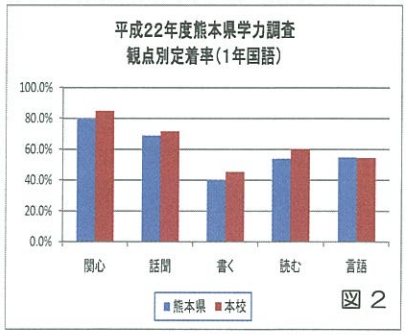


図２

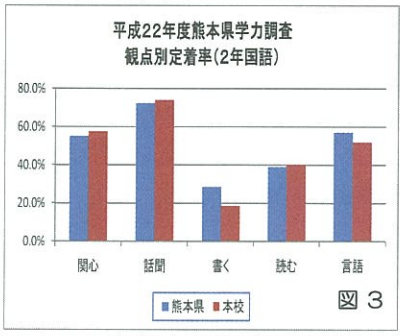


図３

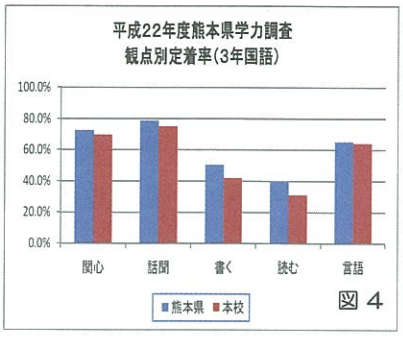


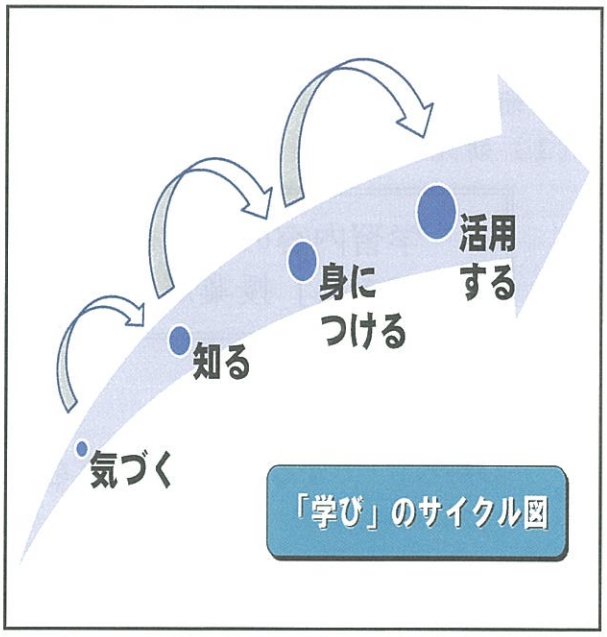
図４

３　研究主題について

（１）【学び】とは

「学び」とは「人が何らかのものごとを新しく身につけようとする営み（『広辞苑』引用）」のことであり、様々な知識や技能などが「学び」によって、その人自身の知識や技能となっていくものである。本研究では、以下のように「気づく」「知る」「身につける」「活用する」というサイクルを繰り返すことにより、研究主題に掲げる「学び」を獲得していくことができると考えた。

「気づく」 自分の既存知識にはない新しい知識と出会うこと。
「知る」 新しい知識を言語として認識すること。
「身につける」 知り得た知識を反復練習等で習得し、自分のものにすること。
「活用する」 別々の知識を自分の中で系統化したり、分類したりすること。



（2）【わかる授業】とは

「わかる」授業とは、いわゆる「授業の内容がわかる」という意味だけでなく、次のような授業も含めて「わかる」授業と捉える。

① 生徒が「何のために学ぶのかがわかる」授業

② 生徒が「達成感や満足感、成就感を味わえる（楽しいと感じる）」授業

③ 生徒が「自らさらに学ぼう、生かそうなどと思える」授業

（3）【できる授業】とは

「わかること」は「理解すること」であり、「できること」は「解決できる」ことと捉え、「わかる」の延長上に「できる」があると考えた。

つまり「できる授業」とは、一般的に「わかる授業」が展開された後、反復練習や経験を積み重ね、問題解決の場面においてその理解した知識をもとに解決できる授業を指す。

しかし、保健体育や技術家庭などの教科では、「理解はしていなくても自然とできる」という場面が多く見受けられる。このように技能は習得しているものの、その要因となる知識が理解できていない生徒に対しては、「できる」から「わかる」展開を視野に入れて授業を進めていきたい。

4　研究の方法

一人一人の学びを大切にする授業を展開し、生徒の「確かな学力」を育成するために２つの部会を設置し、研究を推進することとした。

（1）教師の授業力を上げ、誰もがわかる授業づくりに努める。（授業力向上部会）

（2）基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させるための手立てを工夫して実践する。（基礎学力向上部会）

5　研究の仮説

（1）研究の仮説

学習内容の焦点化・視覚化・共有化を進めていけば、「わかる」「できる」授業が展開され、確かな学力が身につくであろう。

（2）研究の仮説について

「わかる」「できる」授業づくりを目指すため、次の３つの視点から研究を推進することとした。

① 学習内容の焦点化	② 学習内容の視覚化	③ 学習内容の共有化

① 学習内容の焦点化

学習内容の「焦点化」 → **シンプル化**

「学習内容の焦点化」を「授業のねらいや活動を絞りこむこと」と捉え、教師がはっきりと指導のビジョン（授業のストーリー）をもち、本時の目標に向かって発問や指示を絞りこんでいく。教師はできるだけ「１指示１行動」となるような指示を目指していき、それを積み重ねていくことで生徒に「わかった」という成就感や「できた」という達成感をもたせていく。

② 学習内容の視覚化

学習内容の「視覚化」 → **ビジュアル化**

「学習内容の視覚化」を「事実や論理を発見しやすくするための仕掛け」と捉え、生徒の思考を促すため授業の導入、主活動、終末のいずれかの場面の活動において効果的に行う。ただ単にフラッシュカードや挿絵を提示するだけでなく、「時間の構造化」や「モデル図」などを利用していくことも視覚化の一部と捉える。こうして視覚化することにより教師の発問の幅が増え、その視覚情報を用いて生徒に表現活動を行わせたりすることができる。

③ 学習内容の共有化

学習内容の「共有化」 → **シェアリング**

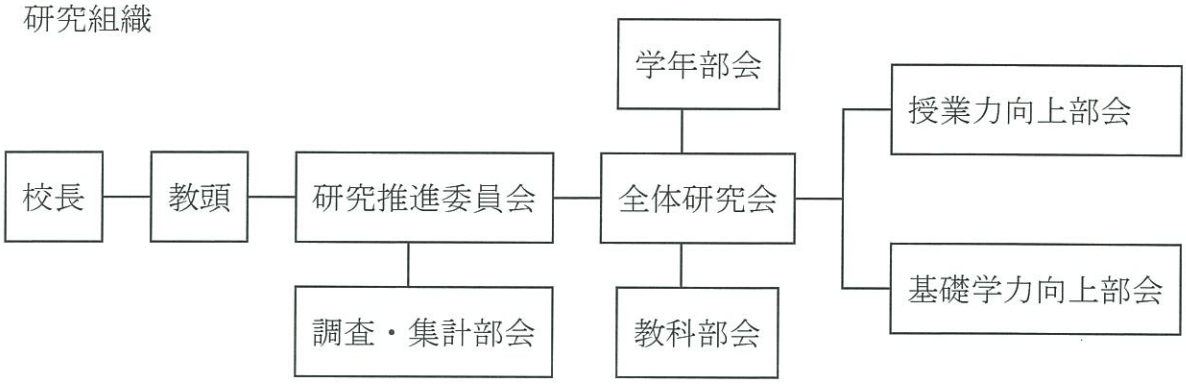
「学習内容の共有化」は「答え」や「知識」を共有するのはもちろん、そこにたどり着くまでの「思考過程」も共有していく。つまり資料の読み方や着目の仕方の共有化、多面的・多角的な見方・考え方の共有化などを通して、教師と生徒、生徒同士が一体となって課題解決に向けて取り組んでいく。

また表現力を向上させるため、授業中に表現する場面を設定して、全体のみならずペア学習及び４人班での学習で言語活動を取り入れていく。

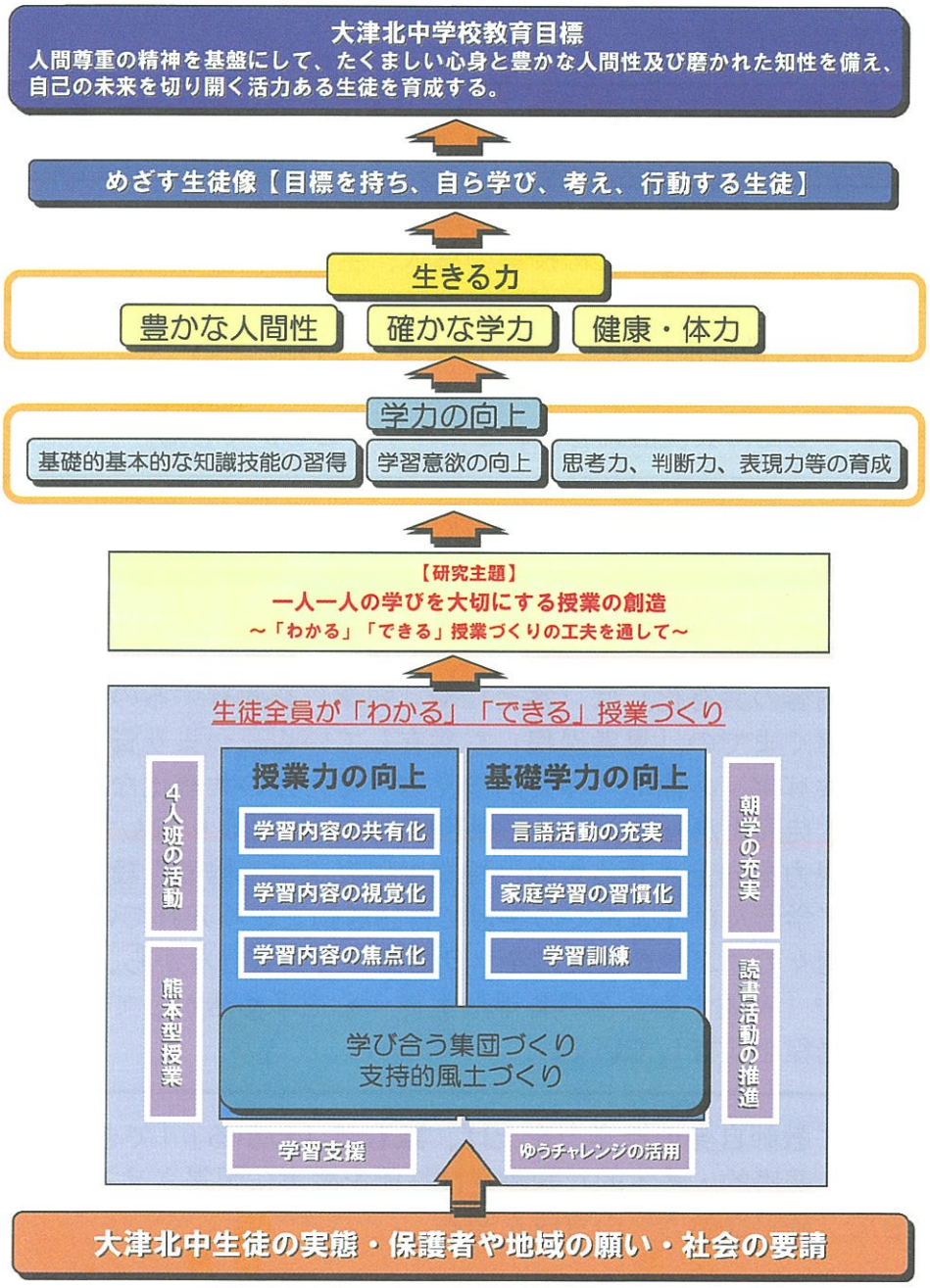
教師は個々のつぶやきや反応をクラス全体で共有しながら、「発問にすぐ答える生徒」や「表現することが苦手な生徒」を上手く活かして本時の目標に向かって思考過程を共有していく。

このように教師自身の授業力を上げ、誰もが「わかる」「できる」授業づくりに努めると共に、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させるための手立てを工夫することで「確かな学力」の育成を図る。

6　研究組織



7　研究構想図



Ⅱ　研究の実際

1　授業力向上部会

（1）研究の視点

昨年度の実践及び成果の考察を踏まえ、今年度の研究主題に基づき、「できる」「わかる」授業実践を目指して教師側の授業力向上による授業改善を行うことを目的とし取組を重ねた。

本部会では、教師の授業実践力を向上させ、様々な状況の生徒が「わかる」「できる」と感じる授業を目指し、３つの視点で取り組んだ。

○授業の焦点化についての工夫
○授業の視覚化についての工夫
○授業の共有化についての工夫

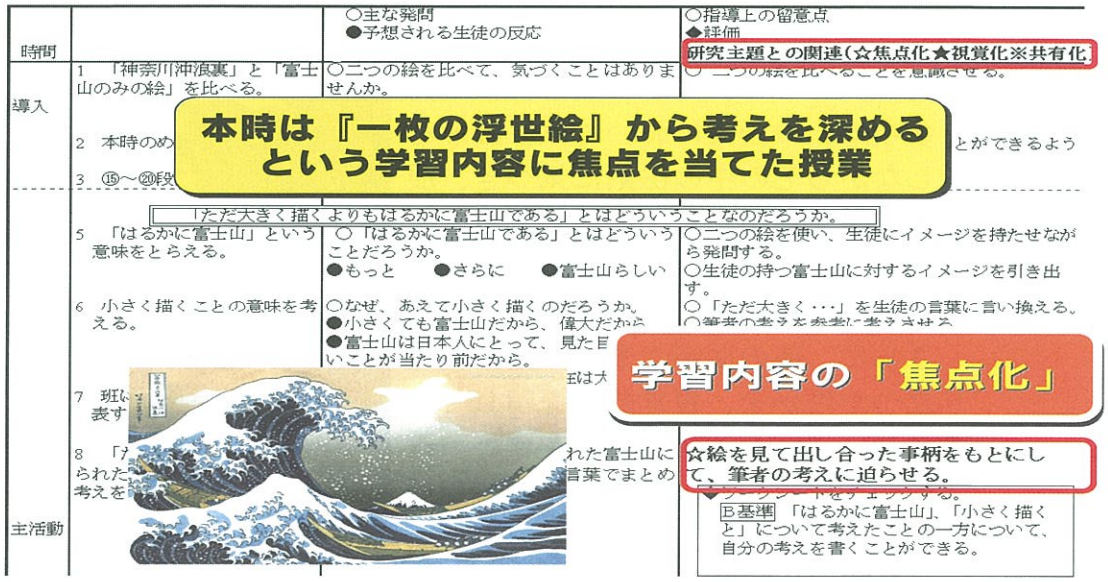
（2）研究の経過

①　仮説に基づく主な取組

ア　授業の焦点化についての工夫

「焦点化」とは“授業のねらいや活動を絞りこむこと”であると捉えた。そして、教師が授業のめあてを提示して全生徒に授業の目標を持たせ、めあてに到達するまでの授業の流れ（ビジョン）を持って授業に臨むようにした。また、発問や活動に対する指示を明確に端的にすることでリズムのある授業づくりにも心がけた。そこで、教師の説明を簡潔にしたり、最後のまとめを的確に行うように工夫し、「わかる」という成就感を持たせるための反復の活動や確認の作業を重ねることも焦点化を進める取組として行った。

さらに、全教室の黒板に[めあて] [ポイント] [まとめ]のカードを常備し、全ての授業でめあてや重要点を明示し、[まとめ]のカードによって本時の授業で何を学んだかを再確認できるようにした。



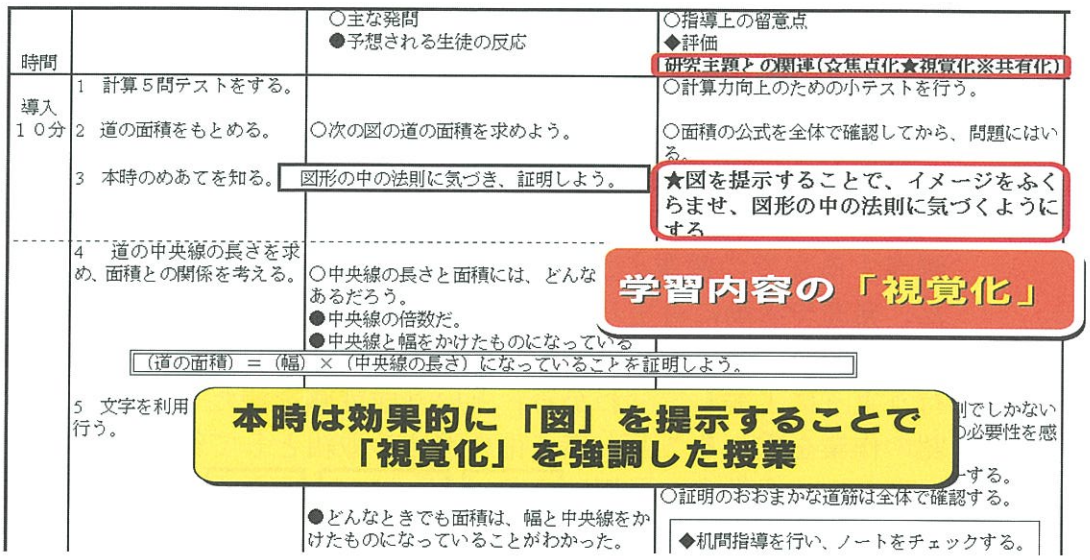
【２年生国語科「読書の幅を広げよう」指導案】

具体例として、２年生国語科の単元「読書の幅を広げよう」の授業においては、浮世絵を導入から生徒に提示し、最後までこの絵を中心に据えて展開した。「富士山を小さく描くことの意味」について生徒の考えを出し合わせた上で、筆者の考えを読み込ませてまとめを行った。つまりこの絵は、視覚化を図りながら、さらに筆者の考えを読み込む活動に対する焦点化を第一に考え使用した。

イ　授業の視覚化についての工夫

「視覚化」とは“事実や論理を発見しやすくするための仕掛け”と捉えた。

教材や板書の視覚的工夫だけにとどまらず、モデル図や活動時間の構造化などの表示、思考の幅を広げるような工夫、さらには視覚情報を用いた生徒の表現活動などを行わせることなどの取組を行った。



時間		○主な発問 ●予想される生徒の反応	○指導上の留意点 ◆評価 研究主題との関連(☆焦点化★視覚化※共有化)
導入 １０分	1　計算５問テストをする。		○計算力向上のための小テストを行う。
	2　道の面積をもとめる。	○次の図の道の面積を求めよう。	○面積の公式を全体で確認してから、問題にはいる。
	3　本時のめあてを知る。	図形の中の法則に気づき、証明しよう。	★図を提示することで、イメージをふくらませ、図形の中の法則に気づくようにする
	4　道の中央線の長さを求め、面積との関係を考える。	○中央線の長さと面積には、どんなあるだろう。 ●中央線の倍数だ。 ●中央線と幅をかけたものになっている	
	（道の面積）＝（幅）×（中央線の長さ）になっていることを証明しよう。		
	5　文字を利用 行う。		則でしかない ○必要性を感 する。
		●どんなときでも面積は、幅と中央線をかけたものになっていることがわかった。	○証明のおおまかな道筋は全体で確認する。 ◆机間指導を行い、ノートをチェックする。

【３年生数学科「多項式」指導案】

具体例として、３年生数学科の単元「多項式」の授業においては、図形を示しながらその中の法則に気づき、展開・因数分解を利用して証明することができるように、そのモデル図の提示の仕方にも工夫して授業を展開した。

さらに、他の図形でもその法則が成り立つか否かを、視覚的に提示して予測させ、文字を利用して式を作り、班で証明を確認した。そして、全体で確認するという共有化へと進めていった。

【モデル図の表示】

また活動時間の構造化については、授業の内容を生徒にあらかじめ提示することにより、学習内容を振り返りながら進め、見通しを持たせることで落ち着

いた授業の雰囲気を作り上げた。そして授業の終末では、本時のまとめとして一つ一つを確認させ、学習内容の基礎的・基本的事項の徹底に役に立った。

【活動時間の構造化】

ウ　授業の共有化についての工夫

「共有化」とは“答えや知識だけでなく思考過程を分かち合うこと”と捉え、言語活動を通して読み方や着目の仕方などを共有したり、班活動や教え合い活動の場面を設定した。また、個々のつぶやきや反応を全体に大きな声で発言させたり、教師が全体に繰り返してやることで、その気づきや考え方を全員で共有させたりした。そして授業中「理解が早く、すぐに口に出して答えてしまう生徒」や「学習進度が遅れがちな生徒」に対する対応についても、教師側が事前に予想される生徒の反応をしっかりと頭に入れて共有化を図っていった。

【学習内容の共有化】

なぜ日本は清と戦争をしたのだろう？

12分	3　日清戦争の経緯と結果について知る。		一斉	○日本と清どっちが勝ったと思いますか？ ●清…人口、面積ともに大きいから ●日本…徴兵制で鍛えられた軍隊だったから	○地図を用いて戦場が朝鮮半島であったことを押さえる。
15分 主活動	4　下関講和条約、三国干渉について調べる。	個別		○下関条約で日本が手にしたものを調べよう。 ○三国干渉とはいったいどんな出来事だろう？	●リヤオトン半島の地理的位置を押さえる。 ○ロシアに対しての対抗心については軽く触れるにとどまる。
12分	5　課題解決を行う。	個別		○なぜ日本は日清戦争をしたのだろう。「きっかけ」「結果」「手にしたもの」「戦後の列強の動き」「戦後の日本の動き」に注目してまとめよう。	○自分の言葉でまとめる時間を確保する。 ※中国の列強分割の絵をヒントとして提示する。 ○まとめかたがわからない生徒についてはヘルプカードを提示させ、個別支援を行う。 ○課題などを早く終えた生徒がいれば、前時の学習内容プリント（クロスワードプリント）をさせる。
終末 3分	7　本時のまと				○本時のめあてを確認する時間を確保し、学習内容の理解の深まりを確認する。 ※キーワードを入れさせることで、本時のまとめを行う。 ○振り返り学習プリントを配布する。

本時は課題解決に向けて基礎的・基本的学習内容の「共有化」を意識した授業

学習内容の「共有化」

【２年社会科「日清戦争」指導案】

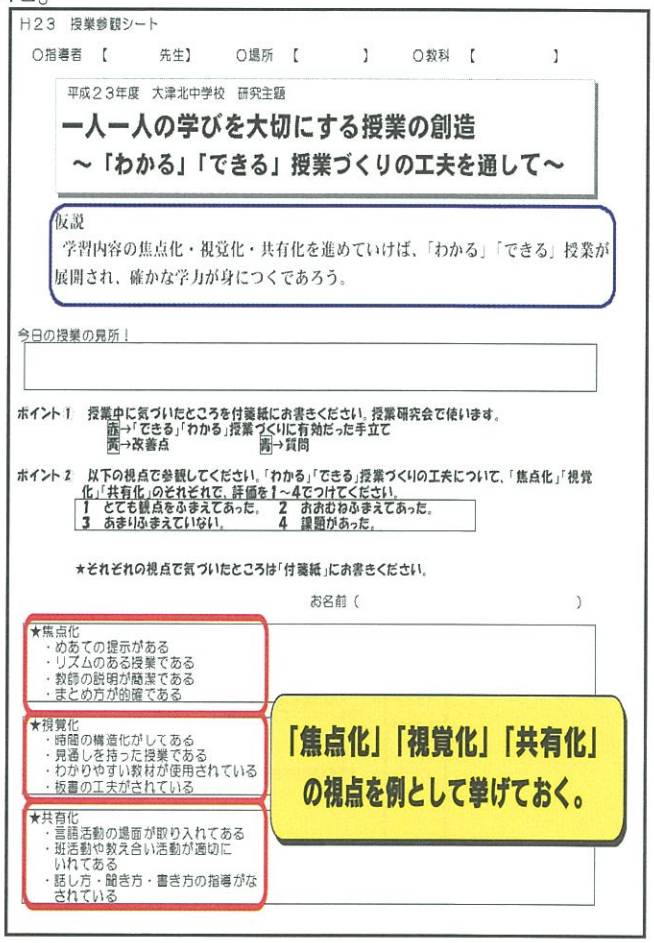
具体例として、２年生社会科の単元「日清・日露戦争と近代産業」の授業において、「日清戦争は日本にとってどのような戦争だったか」という課題解決の場面で、最低限のキーワードを生徒に与えた上で、自分の考えをまとめさせた。これは多様な考えを必要としながらも、拡散しがちな内容の統一化を図るためである。また、同じ方向へと思考させ、生徒同士が互いの考えを出しやすい場を作り出すなどの工夫も行い、学習内容の共有化を図った。

②「授業の焦点化・視覚化・共有化についての工夫」についての方策

ア　校内研修の時間に、まず、研究主任より「焦点化」「視覚化」「共有化」とは何か、そしてどのように進めていくのかについて提案した。基本的には一つの学習活動を「視覚化」と捉えるのか、「焦点化」と捉えるのかは授業者の意図や思いで決まっていくが、本校で統一して共通理解しておくべき点については確認を行った。さらに、授業研究会を重ねていく中で、各教科の中での具体的な「焦点化」「視覚化」「共有化」の工夫について、提示し合いながら、認識の統一化を図った。

イ　指導案中の本時の展開の「指導上の留意点」の欄に、「焦点化」は☆、「視覚化」は★、「共有化」は※で表すこととした。また、日頃の授業においてもそれらを意識しながら授業づくりを行い、活動やノートなどから生徒たちの反応を確認したり、理解や思考の状況をノートやテスト等で確認しながら、次の授業に活かすようにした。

ウ　小研や大研での研究授業において、参観者が「『できる』『わかる』授業づくりの工夫について焦点化・視覚化・共有化の３点についての評価」を『授業参観シート』に記入し、授業研究会で論議することでさらなる工夫改善を図った。


H23　授業参観シート

○指導者　【　　先生】　○場所　【　　】　○教科　【　　】

平成２３年度　大津北中学校　研究主題

一人一人の学びを大切にする授業の創造
～「わかる」「できる」授業づくりの工夫を通して～

仮説
学習内容の焦点化・視覚化・共有化を進めていけば、「わかる」「できる」授業が展開され、確かな学力が身につくであろう。

今日の授業の見所！

ポイント１　授業中に気づいたところを付箋紙にお書きください。授業研究会で使います。
赤→「できる」「わかる」授業づくりに有効だった手立て
黄→改善点　　青→質問

ポイント２　以下の視点で参観してください。「わかる」「できる」授業づくりの工夫について、「焦点化」「視覚化」「共有化」のそれぞれで、評価を１～４でつけてください。
１　とても観点をふまえてあった。　２　おおむねふまえてあった。
３　あまりふまえていない。　４　課題があった。

★それぞれの視点で気づいたところは「付箋紙」にお書きください。

お名前（　　）

★焦点化
・めあての提示がある
・リズムのある授業である
・教師の説明が簡潔である
・まとめ方が的確である

★視覚化
・時間の構造化がしてある
・見通しを持った授業である
・わかりやすい教材が使用されている
・板書の工夫がされている

★共有化
・言語活動の場面が取り入れてある
・班活動や教え合い活動が適切にいれてある
・話し方・聞き方・書き方の指導がなされている

「焦点化」「視覚化」「共有化」の視点を例として挙げておく。

【授業参観シート】

（３）考察

①　授業実施に際して、「焦点化」「視覚化」「共有化」を考えて授業づくりに心がけるようになり、授業内容をより精選しようと教師側の姿勢も向上した。特に

教材研究を行う際、「全員参加の授業づくり」や「どの子にもわかる授業づくり」、「教師目線ではなく、生徒の視線に立った授業づくり」を念頭に置いて、全教科で「わかる」「できる」授業づくりを行った。

② めあて ポイント まとめ のカードを常備することで、教師が授業の流れを意識しながら授業を進めることができるようになり、授業の要点をより明確にする工夫が自ずからできるようになった。そして生徒自身にとっても、授業の流れが全教科で統一されているので、非常にわかりやすいものとなった。

③ 「焦点化」「視覚化」「共有化」に関しては、全体的には概念の統一が図れるようにはなってきたとはいえ、まだ不十分であり、特に教科独自の工夫については、まだ全ての単元・題材について研究を継続する必要がある。具体的には「焦点化したものを視覚化する工夫」や「視覚化したものからわかることを共有化していく手立て」など３つの視点を相互に関連づける研究が必要である。

④ 「視覚化」については、どの教科でもより具体的な取組が進められ、一つ一つの教材を最大限に活かせる工夫ができた。しかし「焦点化」については、理解に時間がかかる生徒に対して、「焦点化された学習内容の理解はできるものの、そこからの発展につながらない」ことや「より細やかな提示の工夫」など、手立てにまだまだ課題が残っている。

⑤ 「共有化」については、概念的にもまだ確立することが難しく、数学や理科などの教科では、計算過程や実験結果の考察などを出し合いながら思考過程を分かち合うという取組ができているが、その他の教科では、単に知識の共有化にとどまっている状況もある。また、保健体育、音楽、美術、技術家庭科の教科については、「共有化させた技能を生徒一人一人のものにしていく指導」が難しいといった課題が残っている。

2　基礎学力向上部会

（1）研究の視点

確かな学力を育むための「学習訓練」「家庭学習の習慣化」「言語活動の充実」を基本とし、昨年度から研究を進めている。昨年度の様々な取組の中で「学習意欲の向上」、「学ぶ姿勢をもった学習集団の育成」において成果が見られた。今年度は、本校の課題でもある学力の向上を中心とし、「基礎的・基本的な知識及び技能」を確実に身につけさせるための手立てを工夫することにした。そのために「徹底」した取組を通し、学ぼうとする姿勢を学校生活の中で、持続させる必要があると考えた。

また、「習慣化」させる中で、目標を持ち、自ら学び、考え、行動する主体性を持った生徒を育成することが大切であると考え、本部会では、以下のことを中心に研究を進めた。

① 効果的な授業実施のためのルール徹底

昨年度の前半までは、授業開始時に着席できていない生徒や、授業中、私語や居眠りをする生徒が多数おり、授業に向かう姿勢が徹底できていない状況があった。そこで、まず５０分間の授業をきちんと行うために、最低限のルールを徹底

させる教師側の関わりを共通実践することから始めていった。

② 読書活動の充実と新聞利用

活字離れによる学力の低下はもちろん、思考力、判断力、表現力等の低下が問われてきている現状は、本校においても県学力調査結果からも明らかである。そのため基礎的・基本的な知識・技能の定着を考えた場合、読書時間の確保は必要事項と捉え、一日の生活を落ち着いた雰囲気でスタートさせることは、集中力を高める効果もあり、学力向上にも有効であると考え、取り組んだ。

また大津町では、町ＮＩＥ推進協議会を設置し、町ぐるみでＮＩＥ（Newspaper In Education）を進めており、本校においても、教育活動の場における新聞活用の取組を進めていった。

③ 朝学習の有効活用と家庭学習

学年が上がるにつれて学力低下の状況が見られ、また学習時間の伸びがあまり見られない傾向がある。そこで、毎日行う朝学習時間に、授業で学習した内容を復習することは、「基礎的・基本的な知識及び技能」を確実に習得する手立てとして有効であると捉えている。生徒のアンケート結果から、家庭学習をどのように取り組めばいいかわからないという意見があった。また家庭学習ができる生徒とそうでない生徒の二極化があることがわかった。

そこで、朝学習で取り組む課題を家庭学習でも反復学習することにした。毎日の積み重ねによって、確認テストで結果が表れ、学習意欲につながると捉えた。

また、家庭学習の習慣化を図る上でも毎日できる課題を与えることも必要である。そのことにより、最終的には自ら学習する姿勢が確立し、意欲が高まり、解決する能力へとつながると考えた。

④ 学び続けるための集団づくり

現代社会は学び続ける意欲と、それに伴う行動が必要な時代である。そして社会に出てからもさらに学んでいくことができるように、理想の実現のために努力を共にできるしっかりとした仲間づくり、集団づくりが大切になってくる。そこで、お互いを知り、違いを認め、励まし、共に伸びるための温かい集団が自分の周りに存在すれば、物事を前向きに捉え、自ら前進する姿勢が育まれると考えた。この取組は、お互いをつなぐとともに、社会に出るための学習であり、それが、全てに対し周りを大切にしながら、「気づき、考え、行動」する自主性を持った生徒の育成につながると考えた。

（２）研究の経過

① 効果的な授業実施のためのルール徹底

授業をスムーズに開始し、効果的に授業を進めるために、学校全体で次のア～ウのことに取り組んだ。

また、生徒にしっかり意識付け、徹底するために右の表示を各教室前方に掲示した。

【授業を大切にする三ヵ条】
①２分前に入室・着席
②イスを入れて起立・黙想
③大きく、はっきり発言・発表

ア　授業２分前の入室

授業を始める前の心構え（姿勢）をつくるために、休み時間には次の授業の道具の準備をする。移動教室の場合には、前の授業が終わるとともに道具の準備や着替えをして移動するようにした。また、自らが動くことを目指し、生徒自身の活動とするために、学級委員・生活委員・文化委員を中心としてお互いに言葉かけをしていくことを、生徒会委員会の場で話し合い確認した。

教師も、授業開始５分前を目安に授業教室へ向かうこととし、休み時間の生徒の様子を確認したり、授業２分前入室の指導を行った。

イ　チャイム起立・黙想の徹底

チャイム起立・黙想の目的は、「気持ちを落ち着かせることで休み時間との区別をつけ、静かに授業を始めることで授業に集中すること」である。授業開始のチャイムとともに全員が起立して黙想を行い、チャイムの鳴り終わりで黙想を止め、号令で始業の挨拶を行うこととした。また黙想をきちんと行うために、椅子を入れて起立し、姿勢を正すことを徹底した。

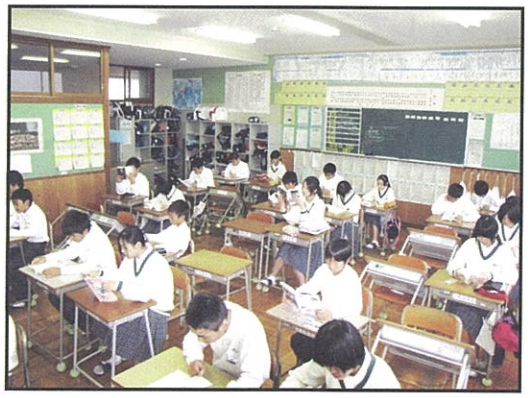
ウ　返事・起立の徹底

授業に対しての姿勢をつくり、授業参加の意欲を向上させるために、授業中に指名されたらきちんと返事し、起立する時には黙想時と同様に椅子を入れてきちんと立つことを徹底した。

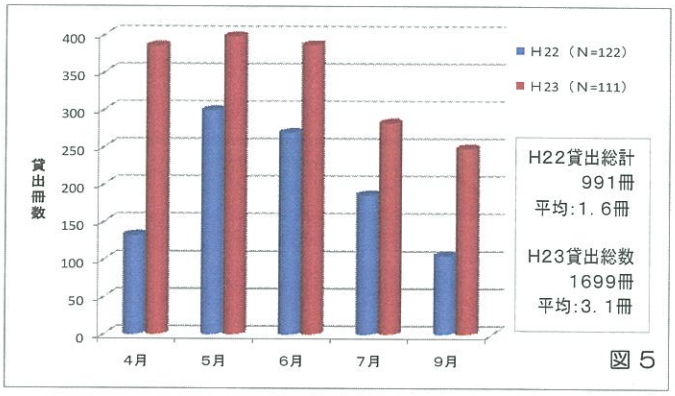
②　読書活動の充実と新聞利用

登校してきた生徒は、７時５０分には教室に入り、８時１０分までの２０分間黙って読書を始める。これは自主的な活動として実施している。そのため、各部活動毎によるボランティア活動及び朝練習は、できるだけ時間に間に合うように調整している。

また、８時１５分から３０分までの１５分間の朝学習時間には、毎月最終の一週間を読書週間としている。読む本は、図書室にある本と限定した。



【読書活動の様子】



【図書館貸出総計の推移】

ＮＩＥにおいては、各教科や生徒会活動等の取り組みをはじめ、掲示板等で紹介している。

【校内掲示のＮＩＥコーナー】

【生徒会によるＮＩＥ活動】

③　朝学習の有効活用と家庭学習

全学年、朝学習８時１５分から３０分までの１５分間、学年ごとに課題を準備し、一週間（水～火）課題に取り組む。実施教科においては、学年で決定し、毎週火曜日、確認テストを実施する。水曜日の朝に返却、昼休みに再テストを実施する。教科担当が問題を作成し、採点は副担任・学習支援員が行う。月の最終週（水～火）は、一週間読書をしている。家庭学習では、自学ノート１ページと朝学習で取り組んでいる同じ課題を毎日プリント一枚を宿題として課し、毎日提出させ点検している。また、自学ノートの内容についてもプリントの内容と同じ課題に取り組んでよいことにしている。

④　学び続けるための集団づくり

ア　４人班の活動

互いに学び合う中で「学びを進め向上させるための環境づくり・集団づくり」を目指して、授業の中で４人班を活用した学び合いの活動を進めた。

イ　北中ブランド

社会に出て大切な事４つを北中ブランドとして掲げ、北中生徒しての誇りとプライドを持たせるため、共通実践事項として生徒会が中心となって実践した。全校集会、学年集会、教科指導、学級、班活動、すべての取組の中で意識し、行動できるようにしている。

大津北中ブランド

○気持ちのよい挨拶をしよう！（立ち止まって）

○時間を守ろう！

○人の話をしっかり聞こう！（黙って）

○無言清掃をしよう！

※北中生としての自覚と誇りを持って行動しよう！

【北中ブランド】

ウ　人権五ヵ条

毎朝８時１０分に、放送委員会のアナウンスで全員黙想をした後、自他ともに大切にする心を育てるための取組として、生徒会が提案し呼びかけきてた「人権五ヵ条」を読んで、一日の目標を確認している。また、人権委員会では、広用紙に人権五ヵ条を書いて、各教室に掲示をしている。

私たちは、一人一人を大切にできる仲間作りをめざし、北中人権五カ条を制定します。

一、私たちは、お互いの個性や意見を尊重し、思いやりを大切にします。

一、私たちは「感謝」と「励まし」の言葉を大切にします。

一、私たちは、いじめ、暴言、暴力を絶対に許しません。

一、私たちは、嫌なことをされたとき、黙ったままではいません。

一、私たちは、人の命の尊さを理解し、行動します。

以上のことを実現するために日々努力していくことをここに宣言します。

平成二十二年十月

大津町立大津北中学校　生徒一同

【人権五ヵ条】

エ　休み時間のクラシック音楽

音楽を耳にすることで心が安らぎ、落ち着いた雰囲気の中で授業へ参加できるように流している。次時の授業開始２分前には、音楽が止み、教室入室は完了する。

オ　朝の健康観察、授業開始時の状態把握

朝の健康観察では、必ず一人一人の名前を呼び、健康状態を確認する。名前を呼ぶことで、それぞれの存在を確認するようにしている。お互いをつなぐ実践の一つとして、休んでいる生徒の状況も知らせるようにしている。

（３）考察

①　校内研修の時間に、部会の中だけでなく全職員で確認し合うとともに、アンケートによる生徒自身の評価を実施・分析し、成果と課題を確認しながら、その後の取組を改善していった。

授業が始まる前に席に着く、椅子を入れて起立する、指名されたら返事をして起立するなど、中学生ならできて然るべきことであるが、教師全員が統一した

問	「基礎学力」に関する質問項目	選択肢			
1	家庭学習を毎日している。	4	3	2	1
2	学習時間は目標（1年1時間、2年1.5時間、3年2時間）を達成している	4	3	2	1
3	家庭学習では、主に予習に力を入れている。	4	3	2	1
4	家庭学習では、主に復習に力を入れている。	4	3	2	1
5	自学ノートの使い方がわかる。	4	3	2	1
6	自学ノートは、自分の学力の向上に役立っている。	4	3	2	1
7	自学ノートよりも、宿題プリントの方が取り組みやすい。	4	3	2	1
8	朝学習に熱心に取り組んでいる。	4	3	2	1
9	朝学習は、自分の学力の向上に役立っている。	4	3	2	1
10	自分は基礎基本の力が身についている。	4	3	2	1
11	ノートはきちんととってまとめている。	4	3	2	1
12	宿題は必ずやっている。	4	3	2	1
13	提出物はいつも期限内に提出できている。	4	3	2	1
問	「授業」に関する質問項目	選択肢			
1	授業前の黙想がきちんとできている。	4	3	2	1
2	授業のめあて（目標）は、毎時間わかっている。	4	3	2	1
3	授業中はしっかりと先生の話を聞いている。	4	3	2	1
4	授業中は意欲的に発表・発言・話し合いなどに取り組んでいる。	4	3	2	1
5	授業の内容を家庭学習に生かしている。	4	3	2	1

【ルール徹底に関する生徒アンケート】

指導をすることで、どの学年・学級でも生徒の授業に対する意識や姿勢が向上した。

また、チャイム起立・黙想から授業が始まることで、授業に対して、静かにきちんと取り組めるようになった。そして、授業に対しての意欲に個人差は見られるものの、全体としては、集中度も向上し授業中の活動にも取り組めるようになった。

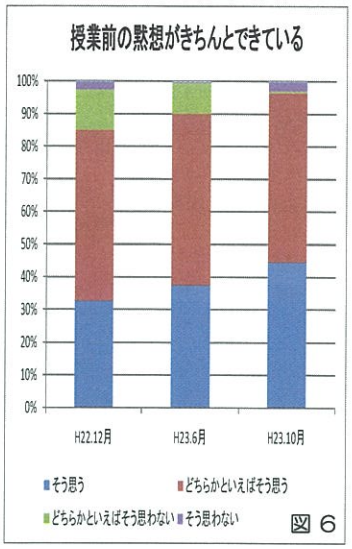


図６

② 登校してきた生徒が、自主的に読書活動（受験対策学習）に取り組むことで、静かな雰囲気の中で学校生活がスタートしている。その結果、全体的に落ち着いた状態で学習に取り組む姿が見られるようになった。

本は図書室にある本と限定したため、図書室を利用する生徒が増加したと同時に、たくさんの素晴らしい本との出会いや発見を感じている生徒も増えた。

また、ＮＩＥの取り組みを通して、新聞を読むという生徒が増え、様々な出来事に興味・関心を持つ生徒が増えた。自分の考えや感想を持ち、まとめることができるようになってきている。

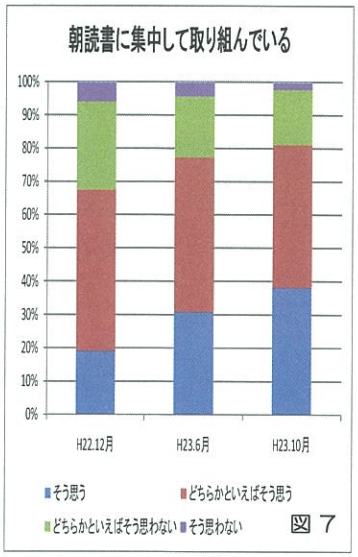


図７

③ 一週間、朝学習で３教科（国・数・社）の基礎的な同じ問題に取り組み、徹底した学習をすることで、確認テストでの合格者が増えてきた。また、班での取組を通して、教え合い学習ができるようになってきた。

自主学習ノートともリンクして実施しているため、学習の仕方がわからなかった生徒も、毎日のノート及びプリントを提出することができ、積極的に取り組む姿勢が見られるようになった。

④ ４人班の活用が思うように進まず、学級における生活班での活動のあり方も全体でそろえることができておらず、授業においても小集団での活動について統一的な取り組みができなかった。

北中ブランドや人権五ヵ条に関しては、生徒会を中心に生徒集会で提案し、呼びかけていく中で少しずつ「自ら動く」という姿勢が見られるようになってきた。またそれに伴って、学級での係活動も同様に積極的な声かけができるようになりつつある。

Ⅲ　研究の成果と今後の課題

1　研究の成果

学習内容の焦点化・視覚化・共有化を進めていけば、「わかる」「できる」授業が展開され、確かな学力が身につくであろう。

（1）生徒の変容

①　「わかる」「できる」授業づくり

生徒アンケート（全学年、全教科対象）から、授業がよくわかる生徒が増加し、「わかる授業」が徐々に展開されているという結果が出た。一方、「授業のめあてがわかっていると感じている」生徒は、平成 22 年 12 月に比べ、一度減少したもののそこから増加している。

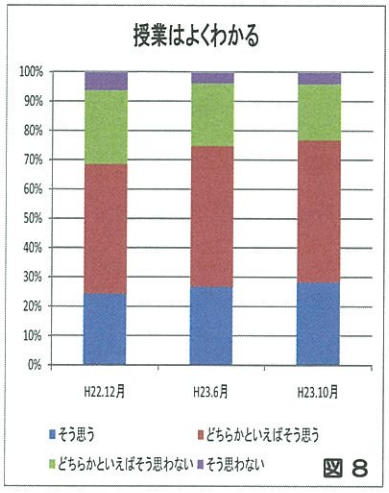


図８

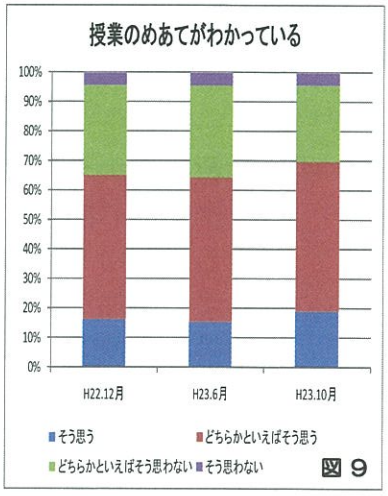


図９

これは平成 23 年に入り、「何のために学ぶのか」「ここでは何を学ぶのか」といった授業の導入部分での授業改善を図った結果だと考えている。めあてが漠然とした内容であったり、単にめあてを掲示するだけであったという反省から、「焦点化」されためあてを、より効果的に「視覚化」し、それを提示したことで、授業のめあてを理解して授業に臨む生徒が徐々に増加したと推測される。そしてそのことが授業がわかる生徒に結びついたと捉えている。

また、授業がわかることで、その内容を家庭学習に活かそうとしている生徒の割合が増えた。そのことで自分自身で家庭学習をよくやっていると達成感を感じている生徒も増加し、授業と家庭学習との連携が少しずつ実を結んできていると考えている。

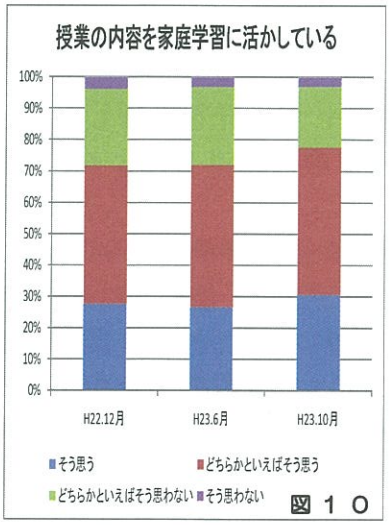


図１０

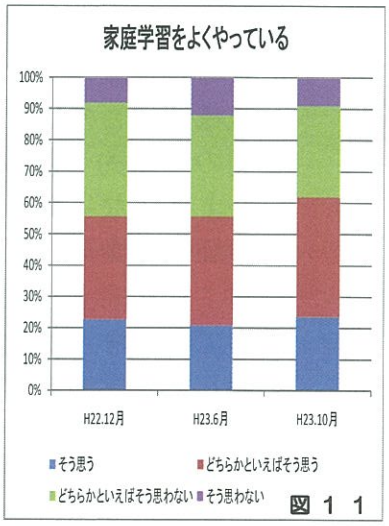


図１１

また平成 23 年度（4 月実施）の標準学力調査の結

果からは、近年、１年生から２年生への落ち込みが大きかった（H20 入学は－４．１ポイント減少、H21 入学は－４．９ポイント減少の落ち込み）が、今年度は－２．６ポイント減少という結果であった。また、２年生から３年生にかけては、わずかではあるが初めて上昇するという結果が出ており、今後とも授業改善等の継続した研究及び実践を続けていきたい。

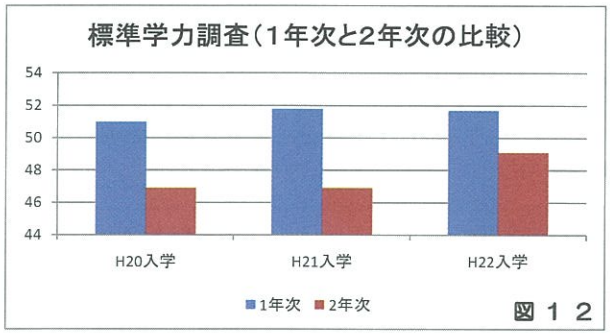


図１２

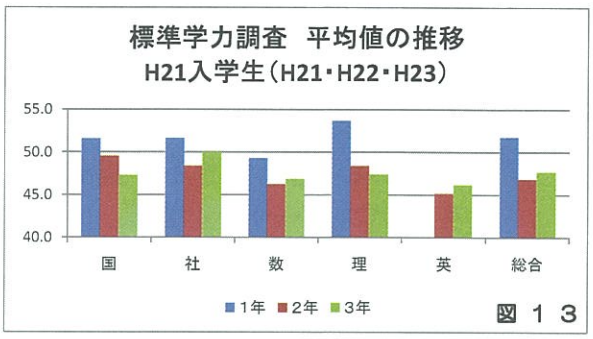


図１３

② 学習へ向かう態度の改善

「授業前の黙想」や「次の授業の準備」など学習に対するいわゆる「構え」ができている生徒が昨年から少しずつ増加してきている。

そのため授業中に「先生の話をしっかりと聞く」「友達の発言や発表をしっかりと聞く」生徒が少しずつではあるが増えてきている。このことは「学習内容の共有化」を図る場面と時間をきちんと教師が設定し、人の話を聞く態度づくりを指導している効果が表れていると考える。

そして基礎学力向上の取組である朝学習の有効活用でも「熱心に集中して取り組んでいる」生徒が増え、「自分の学力の向上に役立っている」と感じている生徒が増加するという結果を得た。また、授業のみならず、その他の学習活動に対しても前向きで、積極的な態度に改善されつつある。

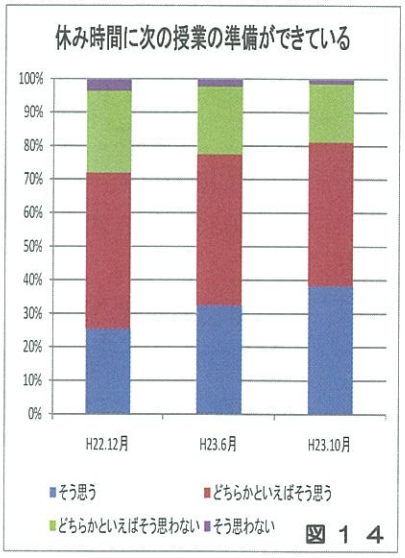


図１４

（２）教師の意識の変化

全職員、この研究を通して単元を見通した指導計画とそれに基づいた１時間、１時間の基礎的・基本的事項の見直しにより、「学習内容の焦点化」を図り、授業に臨むようになった。

教師の授業自己評価（５段階評価）においては、全３９項目中３６項目において、以前よりも向上した結果が出た。特に「ねらいを明確にする工夫」「支援の工夫」「板書の工夫」などが改善された。これは授業研究会（一人一回以上の研究授業実施）を通して、学力充実に向けて授業の焦点化・視覚化・共有化の共通理解を図り、教師集団としてのモチベーションが確実に高まってきている証拠である。特に討議の際には教科や学年だけでなく、様々な小グループ形態をとるなど協議形態を工夫したことで論議が活発化し、内容の深まりが見られたことも要因の一つと考えられる。

教師による授業の自己評価（5段階評価） ※単位はポイント 5そう思う 4どちらかと言えばそう思う 3どちらとも言えない 2あまりそう思わない 1そう思わない	H23年 6月	H23年 10月
話のねらいや内容を、明確に分かりやすく話す。	3.3	3.8
子どもに理解できる言葉を選んで発問する。	3.5	4.1
子どもの既有知識・経験と教材内容との関連を押さえて、発問を工夫する。	2.9	3.5
ねらいにあった教具、機器、メディアを選択する。	2.9	3.6
子どもの発言をしっかりうけとめ、発言中の板書を慎む。	3	3.8
子どもが後でノートを見て授業を振り返ることができるように、板書の計画をたてる。	3.3	3.9
助言や支援の方法（資料、教具の準備を含め）を用意しておく。	3.1	3.6
学習活動に見通しを持たせる。	3.4	3.9

２　今後の課題

（１）学力について

多くの生徒が意欲的に学習に取り組むことができているが、学力の定着については、熊本県学力調査の結果からいまだ厳しい状況が続いており、横ばいの状態である。今後さらに継続した研究や実践が必要と考えられる。

また定期テスト等以外でも生徒自身が、以前に増して学力がついてきていると客観的に知る場面設定をするなど、特に中学校１年生に関しては学習進度や定着率をさらに詳しく分析し、学力向上につなげていきたい。

（２）授業改善について

アンケート結果からわかるように、「授業中困ったことがある」と感じている生徒が、わずかながら減少しているものの、いまだに全体の４０％近くいる。また依然として「授業の進みが早い」「授業中質問しにくい」と感じている生徒の割合があまり変わらないことがわかった。今まで以上に学習内容を絞ったり、言語活動の場をきちんと設定するなどの改善を心がける必要がある。また「学習内容の共有化」については、全教科で効果的に取組が行われているとは言い難い状況にある。「定着化」のみならず「知識及び思考過程の共有化」がどの授業においても図られるようさらなる工夫改善を行いたい。

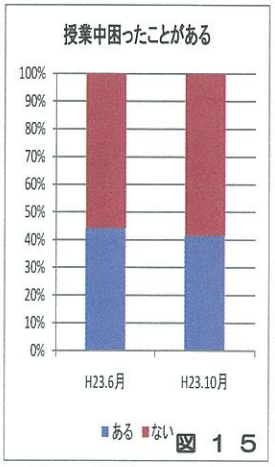


図１５

（３）家庭学習について

現在、家庭学習に取り組む時間に関しては、そこまで大きく変化していない状況にある。今後、保護者に現在の本校の状況を正しく理解してもらい、協力してもらうことで実りある家庭学習習慣を育んでいけるよう取り組んでいきたい。そのためにも系統的かつ継続的に取り組むことができる本校生徒の実情に合わせた家庭学習のシステムを構築していきたい。

（４）学ぶ集団づくりについて

自ら学び、考え、行動する主体性を持った生徒を育成するため、共通理解のもと学ぶ習慣を身につけさせる必要がある。そして学力の向上を中心とした集団づくり

を行う上で、現在、実践できていることを、生徒に評価として返す場面を今後より多く設けていきたい。

（５）生徒の自尊感情について

アンケートからは「授業がわかるようになった」「学校生活は楽しく、充実している」生徒が約９０％、「将来の夢や目標を持っている」生徒が約７０％近くおり、それぞれ増加したにもかかわらず、「自分には良いところがある」と思う生徒が減少していることがわかった。

この原因としては様々なことが考えられるが、生徒の変化としては学習活動や学校生活に対して積極的になっており、「わからない」「できない」から自分に自信がなくなったとは考えにくい。つまり、これら生徒の自尊感情の低下については、学習習慣が身につき、自分の学力や能力を正しく自覚したことで自分自身への見方・考え方が厳しくなったとも考えられる。

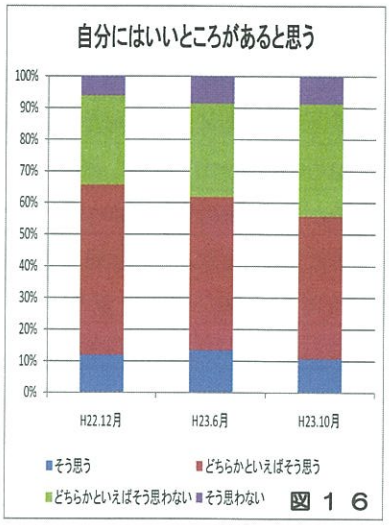


図１６

ただし、これら生徒の自尊感情を向上させる取組は、今後の本校の重要課題であることには間違いない。すべての教育活動でこの取組に力を入れていく必要があり、生徒自らが自分の良さに気づき、集団の中でそれを認め合う学校集団を創り上げる必要がある。

これらの課題を速やかに解決し、さらに「生きる力」を持った生徒が育まれるように、これからも研究を積み上げていきたい。

［参考文献］

【１】文部科学省　「中学校学習指導要領」（2008）
【２】文部科学省　「中学校学習指導要領解説－（各教科）－」（2008）
【３】文部科学省　「中学校学習指導要領解説－総則編－」（2008）
【４】中央教育審議会　「中央教育審議会答申」（2008）
【５】宇佐見寛　「教育において思考とは何か」（1987）
【６】志水宏吉　「公立学校の底力」（2008）
【７】志水宏吉　「学力を育てる」（2005）
【８】日本教育評価研究所「指導と評価（７～９月号）」（2009）
【９】熊本県教育委員会　「確かな学力をはぐくむ熊本型授業の創造を目指して」
【10】東京都日野市公立小中学校全教師・教育委員会
「通常学級での特別支援教育のスタンダード」（2010）
【11】熊本大学教育学部附属中学校
「研究発表会資料」（2010）
【12】甲佐中学校研究同人「研究紀要」（2009）
【13】大津中学校研究同人「研究紀要」（2008）

おわりに

本校は、平成２２・２３年度の２年間にわたり、熊本県教育委員会及び大津町教育委員会から「生きる力」を育む研究指定「学力充実研究指定校」として指定を受け、研究を行ってまいりました。この間、「一人一人の学びを大切にする授業の創造」を研究主題に掲げ、言語活動を重視した学習内容の焦点化・視覚化・共有化を図り、授業の中で「わかる」「できる」場面の工夫を行うことによる授業力の向上を中心とした研究を進めてきました。

その結果、授業のみならず、その他の学習活動に対しても前向きで積極的な態度が身についてきました。また、授業研究会を通して、学力充実に向けての共通理解を図りながら、研究・実践をしていく中で、私たち教職員も意識が変わり、組織体として全職員が取り組んだことが大変大きな力になりました。

しかし、まだまだ研究の途上であり、各学力調査結果における数値上の成果は明確には表れてはいません。今後も取組を継続するとともに、本日御参観いただきました皆様の貴重な御指導、御助言を賜り、学力の向上に向けた取組を工夫改善しながら行っていく所存でございます。

最後になりますが、本校の研究推進にあたりまして、貴重な御指導、御助言を賜りました熊本県教育委員会、菊池教育事務所の先生方をはじめ、大津町教育委員会、本日の研究発表会に御協力いただきました助言者の皆様、御参会いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

研究同人

平成２３年度

豊岡秀敏	服部起明	鍋島靖夫	工藤親正	甲斐　卓
井川雄一	佐尾順子	小夏雅義	町田恭二	堤　浩利
渕上ゆかり	横田正美	渡辺一宣	坂本公代	角野育子
工藤照彦	荒牧淳之介	佐藤省吾	小澤絵美	日置芳邦
緒方千恵	山本夏子	田代健介	山下郁子	益田誠悟
家入真理子	前田　智	原浩太郎	杉本佳子	明瀬友美
小原　俊	後藤健介	小西彩加	田尻阿津子	古澤理恵
小島裕理子	米田留美	藤下洋子	一山直子	坂田良美
山本典子	ﾌﾟｰﾗﾝ ｸﾛｰﾄﾞ ｱﾙﾊﾞｰﾄ			

平成２２年度

松本成樹	緒方敦子	仁木義邦	喜納政直	星田章広
三浦由子	木下さやか	村上沙代	鮎川紗江	植嶋祐二郎
堀　優子	山口祐歌	稲田奈緒美	山本幸子	牧真理子
藤吉久美子				